

こんにちは。きょうは、4月19日配信の『御国巡覧滑稽嘘盡戯』^{おくにじゅんらんこっけいうそつきげ}による江戸時代の青森の旅の続きです。

浅虫の湯と酒肴、島めぐりを堪能した、江戸っ子の喜次郎兵衛と津軽生まれの弥太八は、船で青森町の浜町に着き、翌朝、市中見物に出かけます。二人は、まず、安方町をみてまわり、「一念坊」(現在の「一念寺」)に入って番茶を飲み、「善知鳥宮」で境内を眺めて参拝します。それから新町に出て「市神の塚」と「御蔵」の付近を通り、「安定寺」に入ります。



「一念坊」(現在のアスパム通り「一念寺」)

「市神の塚」は、新町の四ツ辻(旧松木屋デパートと大和証券の間)の人家の前にあり、高さ2メートル余りの常緑樹で、その幹に六尺周りの柵立が施された神木で、「御蔵」は、その南側、現在の県営駐車場の辺りにあり、弘前藩の米が集積されていたところ。『嘘盡戯』では、七夕祭りには、この四ツ辻から「御蔵」の前円に、町中の「ネブタ」が集まり、そこから列を正して、町々へ往来することが書かれています。当時の「ネブタ」の様子がわかり、また、神木からスタートすることを思うと、当時も、青森町の人々にとって「ネブタ」が大切な行事だったことがうかがえて、興味深いですね。



新町の四ツ辻(旧松木屋デパートと大和証券の間)

さて、二人は、その後、「柳町神明宮」、青森町の惣鎮守毘沙門堂などを参拝し、杉林を過ぎて、四か寺を巡るべく、「青森山常光寺」に向かいます。現在の市役所のあたりに「田川の宮」(遷宮前の廣田神社)があり、「杉林」はその辺り一帯から四か寺の南側に広がり、夏の日には、青森の人々は酒肴を携えて、しばしばここで楽しんでいました。

さて、常光寺には金毘羅堂があり、ここには、荒天に遭遇した船乗りたちが神仏に無事を祈願して切った^{まげ}鬘が左右に掛けて奉納されていて、これを見た二人は、そのご利益はさぞかし知られているのだろうと想像します。こうした「^{まげがく}鬘額」は、江戸時代の風待ち湊、深浦の円覚寺が有名です。

二人は次に「正覚寺」を参詣し、芝居小屋「広居座」で芝居を見流した後、「蓮心寺」を参詣します。蓮心寺には、枝の葉が傘のように大きく広がった古松があり、これを観賞します。「見返りの松」として知られる名樹の古松、喜次郎兵衛と弥太八も感嘆をもって眺めたことでしょう。



見返りの松の掛け軸(蓮心寺)

さらに二人は「蓮華寺」を訪れ、本堂、七面堂、祖師の大碑、^{ぼんじん}番神堂を順に参拝し、番神堂の傍からはしごで鐘楼堂の上に上がって、青森市中を眼下に眺めるのです。



蓮華寺

喜次郎兵衛と弥太八の旅は、きょうはここまで。次回は二人の旅の最終章です。